
その他

卒業生座談会を通じた順天堂大学国際教養学部 (FILA) の学位プログラム評価の試み

吉武 尚美¹⁾, 白山 芳久²⁾, 今井 純子³⁾

【要 旨】

順天堂大学国際教養学部の学位プログラムの質を評価する目的で、卒業後の学修成果の自己評価の観点から卒業生座談会をオンラインで行った。卒業年や進路の異なる7名の卒業生が参加した。4つのディプロマポリシーに沿って発言内容を整理した結果、本学部の学位プログラムが進路先やプライベートでそれぞれの卒業生の目標とするレベルに達していたことが確認された。一方で授業方法やキャリア・留学支援など、さらなる学位プログラムの改善に向けた課題が挙げられた。

キーワード：座談会、プログラム評価、卒業生

Others

An Alumni Roundtable Discussion Assessing the Juntendo Faculty of International Liberal Arts (FILA) Program

Naomi YOSHITAKE¹⁾, Yoshihisa SHIRAYAMA²⁾, Junko IMAI³⁾

【Abstract】

A self-evaluation of learning outcomes was conducted through an online roundtable discussion with alumni to evaluate the quality of the Juntendo Faculty of International Liberal Arts (FILA) undergraduate program. Seven students with different graduation years and various career paths participated. Their comments were analyzed according to the four diploma certification policies. As a result, it was confirmed that the FILA program had achieved a certain degree of validity by catering to students' needs to thrive in society. However, several issues were raised to help further improve the program. These issues included the need to incorporate specific teaching methods and provide more support for career tracks and study abroad programs.

Key words: roundtable discussion, program evaluation, alumni

緒言

グローバル社会で活躍する人材の育成を目的として2015年4月に順天堂大学国際教養学部(以下FILA)は開設された。学部定員増(2019年度)、新教育棟の建設(2020年4月)、カリキュ

ラム改訂(2019年度)など、社会の変化とともに様々な変貌を遂げながら、仁の精神を持つ国際的な教養人の育成を行ってきた。高等教育の質保証の取り組みの一環として、カリキュラム評価委員会が学内組織として学部長ならびに

¹⁾ 順天堂大学・国際教養学部 (Email: n-yoshitake@juntendo.ac.jp)

²⁾ 順天堂大学・国際教養学部 (Email: shirayam@juntendo.ac.jp)

³⁾ 順天堂大学・国際教養学部 (Email: j-imai@juntendo.ac.jp)

* 責任者名：吉武 尚美

[2022年9月16日原稿受付] [2022年11月25日掲載決定]

担当教員で構成され、FILA の学位プログラムの質評価の方針に従いデータ収集と評価を行っている。これまでに卒業後の学修成果の評価が行われていなかったことから、委員会主体で卒業生による座談会を実施した。本稿はその報告である。

1. 卒業生座談会の目的

卒業生にとって FILA での経験がどう役立っているかを明らかにすることを目的とする。具体的には FILA の学位プログラム評価の方針に従い、「卒業後の状況等から判断して、期待される学修成果が上がっているか」(付録「FILA プログラム評価の方針」評価項目⑤) を評価する情報を収集する。

2. 座談会参加者

座談会参加者は以下の基準に基づき FILA カリキュラム評価委員会にて選定した：

- ・1 期生が卒業した 2019 年度以降全 3 年間を対象とする
- ・公務員、民間会社など、多様な進路を対象とする
- ・参加者の負担を抑えるため座談会は最大 2 時間とし、活発な意見交換を促すため定員を 10

表 1. 卒業生座談会参加者の内訳

ID	卒業年度	進路
A	2018 年	大学院博士課程
B		地方公務員
C		研究員 (米国在住)
D	2019 年	製造業
E	2020 年	建設業
F		中学校教員
G		大学院修士課程

名とする

担当委員がそれぞれ候補者を挙げ、協議を経て候補者リストを作り、教務課および担当委員を通じて座談会の案内を配布した。結果 8 名の卒業生から承諾を得た。当日は出席予定者 1 名が体調不良で欠席となったため、7 名での実施となった。参加者の内訳を表 1 に、スクリーンショット (加工済み) を図 1 に示す。

3. 座談会実施方法

座談会はオンライン形式 (ビデオはオン) で 90 分実施した。中立性を保つため、司会は FILA に着任 3 年以内の専任教員 2 名が担った。後日、参加者には謝礼を支払った。



図 1 座談会参加者

4. 倫理的配慮

座談会の案内文書には座談会を録画すること、座談会の様子を報告する記事等を公開することがある旨記載した。支障がある場合には事前に連絡するよう求めたが申し出はなかった。また、本稿は参加者に事前配布し承認を得た。

5. 結果

FILA での学修経験や体験が、卒業後のキャリア発達や社会生活に役立っているか、および大学への要望、学生へのメッセージを語ってもらった。以下、FILA ディプロマポリシー（DP; 表 2 参照）の観点の評価するための具体的な語りを引用しながら学位プログラムを評価した。なお、以下に紹介する語りは報告書という形式に合わせ多少編集しており、実際に語られた内容を完全には再現していない。

5.1 大学での学びや経験が仕事の役に立っているか

DP ①で規定する広範な知識の習得、統合、活用の能力は、少人数教育およびアクティブラーニングの積極的活用など、教員との距離が近い環境の中で育成されてきた。こうした経験は卒業しても役立っているようだった：

- ・実際に話し合って仕事をするのは数十人のグループであったりチームになっているので、その少人数の中で成果を作って会社として利

益を出していくという、大学の授業の時と似ていることができていると思う。（E さん）

- ・健康をサポートするという時に人対人、コミュニケーションベースのサポートや、何か発展させていこう、より良い環境にしていこうという時の、（中略）互いに理解しあってより高めていくということがすごく肝になってくると思う。そういう時にヘルスとコミュニケーションを深く両方学べるというのは、うちの学部の良い点ではないかなと思っている。（G さん）
- ・（留学先は）少人数のグループワークが基本的に主体になるコースもあって、順天堂の時にやっていたグループワークというのは、そこでも活かされていると思う。（C さん）

世界的にグローバル化が急速に進展する中で、職場や地域では様々な背景を持つ人々との協働により課題解決を目指す、チームワークが求められるようになってきている（社会人基礎力に関する研究会、2006）。社会人の必須の能力となった多様性を尊重した相互交流（DP ②）について、卒業生は FILA での学びの有益性を以下のように語った：

- ・幅広い分野について学ぶことができたり、学部生のみんな、いろんな分野を将来進路として考えているみんなと学ぶ機会があるというのが、今実際に技術屋がメインの建設会社に

表 2. FILA ディプロマポリシー

次の素質・能力を有するものに学位を授与する：

- ①グローバル化が進む国際社会における人間とその社会的、文化的な営みを包括的に理解するため、自然と人間、生命と健康、人間と社会、世界と日本など国際教養に関わる広範な知識を習得し、それらを統合し、活用する能力
- ②自分とは異なる人間や文化を理解しようと心を開き、多様性を尊重し、寛容さを持って相互交流を図ることのできる能力
- ③母語そして外国語でのコミュニケーション能力を駆使し、多様な人々と繋がり、自らの考えを論理的に説明し、相互の関係を築く能力
- ④グローバル市民として活躍するための基盤となる国際的な教養に加え、文化を超えて活躍できる専門性（グローバル社会、異文化コミュニケーション、グローバルヘルスサービス領域）を備え、人類が直面する問題を発見し、解決策を探る多面的かつ柔軟な思考力と行動力

入社して、理系の研究職の同期であったり、技術屋の同期であったり、もちろん、文系、それから国際を目指している人であったり、宇宙開発を考えている人など、非常に様々な考え方をを持った同期がいる中で、そういった人たちの意見を受け入れたり、自分の考えを持って発言していけるというのは学部生の時に、そういった様々な考えを持っている人たちと学ぶことができたからだ、今実際に感じている。(Eさん)

学校現場にも国籍をはじめ、多様な家庭環境や生育経験をもつ子どもが増えている。教職員にはインクルーシブ教育(文部科学省、2012)や多文化教育(文部科学省、2005)が謳われ、教師にも多様性への感受性が求められている。教職に就いた卒業生は次のように述べている：

- ・異文化コミュニケーションの授業が今の仕事に活かしている。色々な考え方を学んだことで、偏った考えをあまりしなくなった。学校では様々な生徒がいたり家庭環境が様々であったり、ジェンダー的な問題があるので、そういう考え方や視点があるということを大学で学べたことは非常に大きかった。(中略)特に多様性という言葉は、毎日いろんな場面で感じているので、自分のこの考え方は大学の時に身についたものだと思うことが多い。(Gさん)

FILAの1・2年次教育で特に力を入れているのは外国語教育である。DP③で規定されている語学力やコミュニケーション能力が仕事で役に立っているかについて、次のような発言があった：

- ・語学力を大学時代にちゃんと学んでおいたのは、社会人となって使う機会がそこそこある中で、実践的な場面で使用できるようになった。(Eさん)

留学も語学力を向上させるだけでなく見識を

広めるのに有用であり、仕事で外国の人と接する際に役立っているという：

- ・大学3年生の頃に半年間中国に留学に行った。長期間海外に行ったことがあるということで、その国出身の人と話す時にも、話の良い掴みになるので間接的な部分ではあるが、日常生活や仕事の一部になっていると思う。(Dさん)
- ・今は公務員ということで、海外に行くことはあまりないが、近年日本に移住される海外の方も増え、私の勤めている市でも、外国人の方も増えている。そういった中でもどうしても日本人と外国人の方で隔たりのようなものがあるのが今仕事してる中で見受けられる。私みたいに海外経験がある人間が間に入ることで、仲裁というか、弛緩剤のような役割が持てるんじゃないかなど。ゆくゆくはそういった課に配属される可能性もあるので、海外で経験を出来たということは非常に良かったと思っている。(Bさん)

最後に国際的な教養と専門性を持ち、多面的で柔軟な思考と行動ができるか(DP④)について次のような意見が出された：

- ・何か一つの分野に精通するだけではなくて分野横断的に、色々な知識や知見を融合して問題解決をしたり、議論を展開したりするのが重要だと言われてきた。そういった考え方が根底にあって、憲法学の論文を読むのはしんどかったけれども、これもきっと何かの糧になるんだ、これから僕の議論の礎になるかもしれないと思って取り組めてこれた。(Aさん)
- ・幅広い勉強をして、複雑なインプットから簡単な誰にでも伝わるようなアウトプットを出していくという、その一連の流れ、抽象的なものを上手く具体化していくという考え方が、今の仕事の中ではかなり役立っている。(Dさん)

5.2 大学での学びや経験が仕事以外の役に立っているか

語学に向き合う姿勢は卒業後も維持され（DP ③）、キャリア発達や能力開発を後押ししている：

- ・元々国際とか語学に興味があって大学に入ったが、今もその興味は失っていない。最近何か言葉を学びたいと思って、韓国語とかフランス語とか全然違う言葉を学び始めている。（Fさん）

多様な個性が集まる FILA では日常が異文化との遭遇と言えるかもしれない。自分と異なる考え方や価値観を持った学生と出会い、交流する中で、まさに多様性への理解、視野の拡大を実現している。そして、社会に出てからも支え合ったり、情報交換をしたり、ビジネスパートナーになるなど貴重な財産となっている（DP ②、③）：

- ・アカペラ部に所属していて、医学部や看護学部の人たちから、そんな発想なかったとか、そういう考え方は知らなかったとか、国際教養学部ってこういうことを学んでるんだって。お互いの刺激し合いがあるので、一方通行ではないと言うか。向こうのほうが、いっぱい勉強しているけれども、その発想が違うというところで、より深みが増すと言うか、そういった関係性になっていると思う。（Gさん）
- ・大学でできる友達っていうのは価値観とか、いろんな方向性とか、いろんなもので共通点を一番見出せるんじゃないかなという風に思っている。（Aさん）
- ・仕事のプロジェクトで定例会議に参加したが、その時に大学時代の後輩に声かけてみて、会おうかというような話で。実際に立場は違うけれど、大学時代の話をしてきたこともあって、良い経験になった。（Eさん）

5.3 どのような教育内容、授業、支援などが必要だったか

表3に示した通り、FILAの学位プログラムの様々な側面において課題が挙げられた。中でも、授業に関してはアクティブラーニングの一層の推進が期待された（DP ①、②、④）：

- ・抽象的と言うか掴みにくいものだからこそ、大学生が考えられる授業を展開してもらえると、より良いと思う。（Gさん）
- ・（教職課程では）授業のみでなくて例えばテスト制作、評定についてとか生徒指導をもっと掘り下げて欲しい。（Fさん）

また、学生支援のより一層の充実の必要も指摘された：

- ・アメリカの大学院のキャリア支援は、大学のキャリアセンターが卒業生と在校生をつなげてくれるプログラムを実施している。自分と同じゼミや同じ専攻の卒業生と、マンツーマンで自分のレジュメ（履歴書）を見てもらえたり、インタビュー（就職面接）をする場合はこういう質問が来るからこういう風に答えた方がいいよねとか。大抵30分ぐらい、大体4回ぐらいをひと夏の間を経験を積めるといふプログラムがあったので。全くコネがないような状態でも、卒業生と繋がれるという安心感はある。（Cさん）
- ・学部生のサポートと先生のサポートと、大学に残っている学生をうまく使って、それによって大学院にいる学生の勉強にも

表3. FILAの学位プログラムへの要望

授業	<ul style="list-style-type: none"> ・学生に考えることを促す授業 ・ゼミナールでのTAの活用
キャリア支援	<ul style="list-style-type: none"> ・大学院進学を想定したキャリア教育 ・OBOGによるマンツーマンでの就活サポート
留学	<ul style="list-style-type: none"> ・留学先の紹介、仲介 ・留学を支援する寄付制度
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・正課外活動をする場合の欠席救済措置 ・英語を添削するシステム

なるし、そこにちょっと謝礼とかいただけるなら、学生のサポート、やっている学生のサポートにもなるって言う win-win な関係性になるとも思う。(G さん)

6. おわりに

本座談会には過去3カ年の卒業生に参加していただき、2時間弱の短い時間であったが充実した討議ができた。過去6年のFILAの学位プログラムを卒業生の視点から評価した初の試みである。参加者の発言からは、分野横断的な学び、多様性の出会いと理解、アクティブラーニングや正課外活動を通じた実践的な学習経験が卒業した今も役立っており、豊かな教養、卓越した外国語の運用能力、グローバルな知識を身に付けたグローバル市民の育成を教育目標としたFILAの学位プログラムの特色が社会で有用であることが伺われた。

今回の座談会は2019年度に学部収容定員の倍増が行われる以前の卒業生によるものであった。短期間での呼びかけに応じてくれた意欲的で良心的な卒業生ばかりであったため、結果が肯定的な評価に偏っていたことは否めない。2022年度末からは卒業生も倍増する。彼らのFILAでの経験や認識は今回の座談会に参加した卒業生たちと異なるかもしれない。ICT(情報通信技術)化、格差や環境問題に取り組むSDGs(持続可能な開発目標)の実践など、急速な社会の変化に応じて社会の中核で活躍する人材を育成する教育機関として大学教育も変わり続ける必要がある。今後も卒業生による学位

プログラム評価を実施し、教育の質の担保と向上に向けた実践と評価を継続していかなければならない。

謝辞

座談会の司会および文字原稿のご高閲をしていただきました順天堂大学国際教養学部の原和也先生、高濱愛先生に心よりお礼申し上げます。そして、座談会にご参加くださった卒業生の皆様に深く感謝申し上げます。卒業生の活躍は学部ホームページでも公開され始めており<https://goodhealth.juntendo.ac.jp/pickup/000072.html>、今後も学部や学生の成長に卒業生の声を積極的に反映させていければと考えています。

引用文献

- 文部科学省(2005)「初等中等教育における国際教育推進検討会報告—国際社会を生きる人材を育成するために」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houkoku/attach/1400589.ht(2022年9月5日)
- 文部科学省(2012)「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」https://www.mext.go.jp/content/20200227-mxt_tokubetu02-000005249_18.pdf(2022年9月5日)
- 社会人基礎力に関する研究会(2006)「社会人基礎力に関する研究会『中間とりまとめ』」https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/001_s01_00.pdf(2022年9月5日)

付録

FILA プログラム評価の方針（抜粋）

1. 既存の教育プログラムの定期的なモニタリング

既存の教育プログラムの毎年のモニタリングや定期的なプログラム・レビューを行い、その結果をプログラムの改善や変更に使っているか。

- ・モニタリング：入学状況、進学、留年、退学の状況、卒業や進路の状況に関する定量データの収集と分析や、入学時調査、学生調査、授業アンケート、卒業時調査、卒業生調査、雇用者調査などの各種の調査を実施する。
- ・プログラム・レビュー：それらのデータをもとに、入学から卒業後までの状況を分析することにより、学生の学修成果を把握し、それに基づき教育の有効性を検証する。

2. カリキュラム・ポリシーに基づくレビューの実施

評価項目① カリキュラム・ポリシーに則して、教育目標を達成するように、カリキュラムが体系的に設計されており、教育内容や方法の面で適切に構成されているか。

【視点の例】

- ・カリキュラム・ポリシーに基づいて、ディプロマ・ポリシーに定められた学修成果とカリキュラムとの対応がとられているか。

【根拠となる資料・データ等例】

- ・カリキュラム・マップ、コース・ツリー、履修モデル、コース・ナンバリング等。

評価項目② 教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づく教育課程を学生が修了するために、教育課程が効果的に実施されているか。

【視点の例】

- ・講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法が採用されているか。

【根拠となる資料・データ等例】

- ・学生便覧、シラバス、授業科目案内、履修要項等、教育課程の中での授業形態の組合せ・バランスが確認できる資料。

評価項目③ 期待される学修成果の達成の程度について、適切に評価しているか。

【視点の例】

- ・学生の成績評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

【根拠となる資料・データ等例】

- ・成績評価基準、成績評価方法、GPA 制度の実施状況の資料や、評価基準等を学生に示した資料。

評価項目④ 期待される学修成果を学生が達成しているか。

【視点の例】

- ・各学年や卒業時等において学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学修成果が上がっているか。特に、学生が何を学んだかよりも、学生が何をできるようになったかという視点を重視する。

【根拠となる資料・データ等例】

- ・単位取得状況、進級率、留年・休学・退学の状況、卒業率、標準修業年限内卒業率、学位取得までの期間の分布。

評価項目⑤ 卒業後の状況等から判断して、期待される学修成果が上がっているか。

【視点の例】

- ・就職や進学といった卒業後の進路の状況等の実績から判断して、学修成果が上がっているか。
- ・卒業生や、就職先等の関係者からの意見聴取の結果から判断して、学修成果が上がっているか。

【根拠となる資料・データ等例】

(主に直接的な根拠・データ)

- ・卒業後に受験する資格試験の点数や合格者数・合格率。

(主に間接的な根拠・データ)

- ・進学率や進学先の状況。
- ・就職率や教育目的と就職先の業種・職種の関係。
- ・身に付けた学修成果に関する卒業生の自己評価(卒業生アンケート調査やインタビュー等)。
- ・卒業生が就いた職務内容への満足度(卒業生へのアンケート調査やインタビュー等)。
- ・卒業生に対する雇用者からの評価(雇用者へのアンケート調査やインタビュー等)。
- ・卒業生の社会での活躍等が確認できる資料(新聞記事など)。
- ・卒業生の受賞。
- ・卒業生や雇用者からの寄付などの大学への貢献状況。

大学改革支援・学位授与機構(2017)。「質保証システムの現状と将来像に関する研究会教育の内部質保証に関するガイドライン」を改変